

ケブカクロオオアリ\* (*Camponotus  
herculeanus* subsp. *vagus* var.  
*yessensis* TERANISHI) について

*Camponotus herculeanus* subsp. *vagus* var. *yessensis* TERANISHI の記載は故寺西暢氏の遺稿の中から見出され、同氏遺稿集に新変種としてはじめて載せられたものである(寺西暢遺稿集 未発表遺稿, 72頁, 1940)。欧州産の *vagus* と同様体に直立長硬毛を豊富に生じているが、軟毛が遙かに少なくかつ短い点において *vagus* と異なる。同氏が本種の産地として挙げられたのは北海道(札幌, 定山溪, 厚別)であるが、習性や棲息場所その他については何ら記述されていない。私は今まで本州でも数回この蟻を採集観察する機会があったので、以下これについて少し述べることにする。

この蟻を私が最初に見たのは、1935年8月24日、飛騨側よりの薬師嶽登路に当る跡津川沿いの土——大多和——有峰路であった。その所は土より少し登ったばかり、跡津川部落との中間の標高400 mの場所で、樹のない草の生い茂った斜面を、右手近く川原を見下して横切る日当りのよい山裾であった。クロオオアリ (*Camponotus herculeanus* subsp. *japonicus*) やクロヤマアリ (*Formica fusca* var. *japonica*) の盛に歩きまわっている路の傍に太い切株の朽ちたのが横たわっていた。私が何気なくその表面をひきはがすと、中からこの黒い大きな蟻が何頭もとび出してきて私の手に噛みついた。一見した所それは、色も大きさも形もクロオオアリそっくりだったが、しかしクロオオアリにしては営巣個所が変だし、それにクロオオアリに比べて遙かに孳猛であった。よく見るとクロオオアリよりもずっと光沢が強く、その上、頭、胸、腹の背面に、クロオオアリに見られない白い長毛が一面に密生していた。

直ちに *vagus* に近縁のものと思われたが、これがケブカクロオオアリであった。本州の蟻相に新しくつけ加えるべきものである。

次に私がこの蟻を見たのは同年7月21日に東北地方早池峯山麓御山川沿いの標高約550 mの場所である。この辺りは道の両側に潤葉樹が繁っていたが日当りはそう悪くなく地面は乾燥していた。歩く蟻ではクロヤマアリが最も多く、トビイロケアリ (*Lasius niger*) がこれに次いだ。その間に混ってケブカクロ

オオアリも歩行していたのである。これらの蟻の他、この辺りではムネアカオオアリ (*Camponotus herculeanus* subsp. *ligniperda* var. *obscuripes*) も見つかったがその数は少なく、やや離れてはエゾアカヤマアリ (*Formica truncorum* var. *yessensis*) やクロクサアリ (*Lasius fuliginosus*) も局部的に姿を見せていた。前者は少し開けた乾燥地に、後者はよく茂った樹陰に。なおその他数種の蟻がいたが何れもそう暗くない疎林にならどこにでも普通な種類であった。

その後私は渋谷寿夫氏の高野山からの採集中にこの蟻を見出した。場所は陣ヶ峯 800 m、薄峠道 900~1,000 m などで、クロヤマアリと共に採集されていた。

今年(1940年)6月のはじめ、私は美濃揖斐川上流、門入の部落(標高約400m)で本流に渡した長大な杉の丸木橋のたもとに本種が多く歩いているのを見つけた。おそらくこの古くなった橋の材中に営巣していたものであろう。行動はすこぶる敏捷であった。なお付近の草につくアブラムシに集合している個体もたくさんいた。近所にはやはりクロヤマアリやクロオオアリが無数に生活しており、その他トビロシワアリ (*Tetramorium caespitum* subsp. *jacoti*) やトビロケアリも見出された。

京都府下丹波の京大演習林からの渋谷氏の標本の中にも本種の1頭が混っていたが、今年の7月の終りに私もここに赴いてその棲息場所を見ることができた。演習林事務所(須後、標高約360m)の前には製材所が設けられており、その辺りには軌道に沿って一面に木片、樹皮、大小の丸太などが散乱している。オオハリアリ (*Euponera solitaria*) やアマミアリ (*Pristomyrmex pungens*) が、切り出されて放置された古いトチの巨木の樹皮下に営巣していたり、*Dolichoderus quadripunctatus* subsp. *sibiricus* が樹陰に立てかけられた丸太や割木の上を歩きまわったりしていた。日当りのいい地表にはクロオオアリやクロヤマアリ、トビロケアリなどが走り、これらの間にやはりこの *vagus* の変種の群が混っていた。なお樹陰の丸太の上をも往復しているものもあった。大小さまざまな職蟻は捕えようとすると非常に敏捷に避けてなかなかつかまらない。しかし、巣をあばいた時と違って、人に対し攻撃に向って来る個体はなかった。クロオオアリとの区別は慣れればその顕著な光沢だけで容易につけることができた。

なお演習林から朽木村を琵琶湖西岸に抜ける途中、能家——上村 両部落間(標高320m)の道路の傍の炭焼小屋の前に置かれた丸木の上にもこの種類がた

くさん歩行しているのを見出した。

北海道産の本種の個体は、今年8月私は野幌国有林の林縁で採集することができたので、本州産の個体と比較して見たが、両者の間には何らの差異も見出し得なかった。

以上のように、ケブカクロオオアリは広く北海道、本州の各所に分布しているものと見ていいが、分布地区がこのように広いのかかわらず、どこでも普通に見出すことができるとは限らない。少なくとも今まで見出されたのは割合に限られた局部局部であって、クロオオアリのように連続した分布を示していない。のみならず一地域の中に比較的接近して同様と思われる条件の場所が幾つか並んでいても、その1つだけに、しかもその中の一部分のみ見出されている。このような点にはなほだ興味ある問題を含んでいるものと思われるのである。棲息場所は上に述べた所で明らかなように、日当りのいい乾燥地で、クロヤマアリやクロオオアリの棲息にも適した所である。陰湿な感じの場所には見つけることができなかつた。ただクロオオアリと違って、営巣個所として古い樹木あるいは朽木などの存在を必要とすることは間違いないと思われる。棲息場所や営巣個所に関するこれらの点、ならびにその行動などは欧州産 *vagus* とほとんど異ならないようである。もっとも欧州の *vagus* はしばしば家屋の材部に営巣するといわれ、また南欧ではコルク樫に孔を穿って害を与えるという。

ケブカクロオオアリの有翅虫は私には未だ見る機会が与えられず、したがって飛出の時期についても知る所がないが、欧州の *vagus* の飛出が盛夏である点からすれば、おそらく同じ時期であろうと思われる。

註

- \* [73頁] 体を蔽う豊富な長毛に因み、本種に対しこの和名を提唱する。

